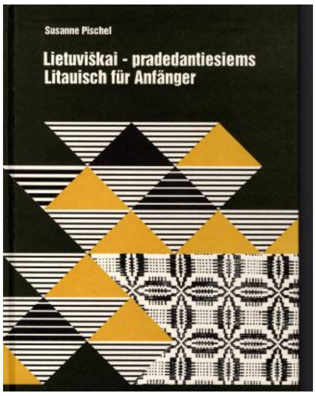
こんな時代にロシア語のすすめ　第 14 回

「リトアニアで大事件」（前編）



ドイツ語で書かれた音源付きリトアニア語教材

黒田　龍之助

学生時代のわたしはロシア語を学習しながらも、旧ソ連諸共和国に幅広く関心がありました。スラブ圏であるウクライナとベラルーシは当然としても、それ以外でもっとも惹かれたのがリトアニアでした。興味の中心はもちろん言語です。

リトアニア語は言語学的にインド・ヨーロッパ語族というグループに属します。ここには英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ロシア語など、主要なヨーロッパ諸言語はハンガリー語とフィンランド語を除けばたいていこれに含まれます。この語族はさらに語派に分かれ、英語やドイツ語はゲルマン語派、フランス語やスペイン語はイタリック語派です。その中でリトアニア語が属するバルト語派は、ロシア語が属するスラブ語派と関係が近いといわれています。大学院生になって、スラブ語派の諸言語に関する論文を読んでいると、リトアニア語が引用されることもしばしば。興味を持つのも当然なのです。

JIC などの仕事を通して、バルト諸国ではロシア語通訳の仕事をいろいろしましたが、エストニアとラトビアは訪れたものの、リトアニアだけは何故か縁がありませんでした。エストニアもラトビアも面白いのですが、エストニア語はフィンランド語に近い別系統の言語ですし、ラトビア語はバルト語派に属するもののリトアニア語ほど古形を残していないので、歴史文法に興味のある大学院生には少々距離を感じます。

やっぱりリトアニアなんです。

現地へ行きたかったのですが、それよりも言語を学びたい気持ちのほうが強かったです。ところが当時はそれがタイヘンでした。まずリトアニア語を教えてくれる学校がない。それどころか教科書もない。いまリトアニア語を勉強したいと思ったら簡単で、櫻井映子『ニューエクスプレスプラス リトアニア語』（白水社）を買ってきて、それをせっせと覚えればいいでしょう。ところがわたしの学生・院生時代にはそのようなものがなく、それどころか外国語で書かれた教科書を手に入れることさえ、容易ではありませんでした。

それでも 1990 年代になると、ロシア語や英語で書かれたリトアニア語の教材が少しずつ出版されるようになり、それを元に勉強しました。誰も教えてくれませんから、もちろん独学です。大学の非常勤先に向かう電車の中をリトアニア語の勉強時間と決めて、混んでいるときは吊革にしがみつきながら教科書を睨みます。我ながら涙ぐましい努力です。独学はつらいよ。さらに外国語を勉強するときは、やっぱり音が聴きたい。ところが教科書は手に入っても、音源付きがなかなかありません。やっと見つけたのはドイツ語で書かれた教材の付属カセットテープ。リトアニア語の間にドイツ語も流れるので、そっちのほうが気になって仕方がありません。これじゃドイツ語のほうが上達しそう。

やっぱり現地で学ぼう。そろそろ機が熟したようです。

21 世紀になってから、夏休みを 1 か月使って第二の都市カウナスでリトアニア語の研修に参加しました。振り返ってみれば、これがわたしの最後の海外研修でした。そのときの話は『ポケットに外国語を』（ちくま文庫）に書きましたので、ここでは省略します。間抜けな失敗や勘違いをくり返しながら、ドイツやポーランド出身の若い受講生と机を並べて必死に勉強しました。

どんな外国語でも、現地で学んでいるからといって、急に上達するわけではありません。そのうえリトアニア語は、ロシア語に輪をかけて文法が複雑な気がします。たとえば格変化では位格というのがあって、これはロシア語の前置格に近いのですが、ロシア語と違って前置詞なしで場所が示せるのです。Kaunas「カウナス」の位格形 Kaune は、これだけで「カウナスで」という意味です。ロシア語はもちろん、英語でも前置詞を使いますから、こういうのは慣れるまで、なかなか使いこなせません。

そういうわけで、別の外国語に頼らなければならない場面もありました。当時のリトアニアでは、若い世代は英語、年配の方々はロシア語で、両方がわかる人はめったにいませんでした。相手によって使い分けなければならないので、いろいろ気を遣います。

首都ビリニュスにある、芸術家チュルリョーニスの博物館を訪れました。リトアニア人のガイドさんは、英語とロシア語の両方ができるそうです。さすが。そこでロシア語で案内をお願いしました。たいへん上手なロシア語だったのですが、ときどき кто「誰」と что「何」を逆に使っています。実はリトアニア語の疑問詞 kas は「誰」と「何」の両方を表すのです。その影響で間違えてしまうのでしょう。ロシア語でも英語でも、日本語だって区別する概念が、リトアニア語では

１つになっているとは面白い。
　やはり外国語は、実際に勉強してみないと気づかないことがありますね。

　研修に参加した翌年の夏、カミさんといっしょにヨーロッパを旅行した際、リトアニアにも寄りました。宿泊は首都ビリニュスでしたが、天気の良い日を選んで、２時間ほどバスに揺られてカウナスに行きました。自分の「留学先」をカミさんに案内して、リトアニア語ができるところをちょっとだけ自慢したかったのです。難しい話はできないけれど、簡単な日常会話くらいだったら、前年の経験から上手にこなせる自信がありました。
　ヨーロッパでは食事のとき、チップを渡す習慣があります。といっても特別に用意する必要はなく、請求書の額に少し加えて渡せばいいのです。たとえば合計 328 だったら、切りよく 350 を渡す。では手元に細かいのが 350 なくて、たとえば 500 札しかなかったらどうするか。そういうときは「350！」といって渡せばいい。相手はおつりを 150 渡してくれるはずです。間違っても日本語の感覚で「500 でお願いします」といってはいけません。おつりは一円も返ってきません。
　これができると気持ちがよくて、チェコやポーランドでも成功体験があったので、カウナスのレストランでもやってみました。カミさんの前でカッコいいとこ見せたいですからね。ところがそのウエイターは、わたしのリトアニア語に対してけげんな顔をしてその場を立ち去り、しばらくしてからお釣りを律義に 172 持ってきました。つまりわたしが発音したリトアニア語の数詞が、理解できなかったわけです。カミさんはニヤニヤ笑っています。わたしはもらったお釣りのうち 22 をテーブルに残して、すごすごと店を後にしました。ああ、情けない。
　外国語は急に身につきません。加えて復習もせずに１年も放っておけば、忘れてしまうのも当然。やはり日々コツコツと続けるしかないのです。それでも多少は覚えているもので、たとえば帰りのバス車内に流れるラジオニュースでは、ニューヨークが盛んに話題になっていることが聴き取れました。でも詳しくはわかりません。なにか事件らしいのですが、わたしのリトアニア語ではこれ以上は無理でした。
　ビリニュスに戻り、ホテルに帰るとフロントにあるテレビではアメリカ CNN のニュースが流れていました。字幕には Breaking News つまり臨時ニュースとあり、ニューヨークの高層ビルから煙が出ています。ビル火災でしょうか。事件には違いありませんが、それにしてもラジオニュースといい、このテレビ番組といい、外国の火事くらいですこし大袈裟ではないでしょうか。
　それがわたしのトンデモナイ勘違いであることに気づくのは、数分後のことでした。
　その日は 2001 年 9 月 11 日、アメリカ同時多発テロだったのです。（この項、続く）

＜日ロ交流情報＞

ロシア語映画発掘上映会
回を重ねて 20 回！継続は力なり

　ロシア語映画発掘上映会（主催；Ace Square 守屋愛代表）は順調に回を重ねています。
第 18 回 11 月 2 日「針 REMIX」(ラシド・ヌグマノフ監督、ビクトル・ツォイ主演、2010 年)
第 19 回 12 月 28 日「1950 年代ソユズムリトフィルム制作アニメーション特集」
第 20 回 1 月 10 日「ЧП　非常事態」(ヴィクトル・イフチェンコ監督、1959 年)
と、最近はほぼ 1 か月に 1 回のペースです。まさに「継続は力なり」。ロシア語映画発掘上映会は映画好きのロシア関係者の間ですっかり定着したようです。守屋愛さんに、この 3 年間の取組みを振り返り、当初予期しなかった新しい発展の芽が見えてきたこの発掘上映会の成果について、本号に寄稿していただきました（19 頁に掲載)。

横山周導師１周忌で偲ぶ会
語り伝えたい慰霊と平和の思い

　シベリア抑留犠牲者の慰霊とシベリア出兵戦争のロシア人犠牲者の鎮魂、日ロ両国民の平和を願う旅を長年続けてこられた横山周導師(岐阜県揖斐川町・勝善寺住職)が 24 年 8 月に亡くなられて 1 周忌。10 月 25 日に、「慰霊と鎮魂の旅」を続けてきた有志の

皆さんが勝善寺に集まり、「偲ぶ会」が開かれました。

「シベリア抑留・シベリア出兵の悲劇を二度と繰り返すまい」と、アムール州・ハバロフスク州の人たちと交流を続け、慰霊と平和の取組みを続けてきた横山さんの思いを引き継ぐために、自分たちはこれから何ができるだろうかと、一人一人が思いを巡らせる偲ぶ会となりました。

ロシア文化フェスティバル IN JAPAN

好評博した民族アンサンブル公演

ロシア文化フェスティバルで、「ルースカヤ・ヤルマルカ」のコンサートが、11 月 6 日、東京・市ヶ谷のルーテルセンターで開催されました。バヤン、バラライカ演奏家のゲンナージイ・シシリンさんとその家族 4 人によるロシア民謡 20 曲余りの演奏に参加者は大満足でした。

11 月 26 日、ドキュメンタリー映画「デルスウザーラ・黒澤明のロシアの夢」の上映と監督講演会が、浜離宮朝日ホールでありました。

12 月 1 日には「ロシアの音楽大学・劇場アカデミー卒業生による名曲コンサート」が、東京港区の在日ロシア大使館ホールで開催され、ピアノ、ヴァイオリン、アコーディオン、声楽などのアーチスト 16 名が競演しました。

（写真）12 月 1 日、在日ロシア大使館にて

ロシア文化フェスティバルは2026年に開始20周年を迎えます。これを記念して、10 月末にロシア最高の舞台芸術と言われる「モイセーエフバレエ団」の来日公演が予定されています。

ロシアの素顔を知ろう会・奈良

ロシア在住写真家・田中さんの講演会

「日本の報道ではロシアの本当の姿がよくわからない。ロシアに住んでる日本人に話を聞こう」と、ロシア在住写真家で、現地から Facebook の発信を活発に行っている田中よしひろさんが一時帰国するのを機に、その講演会が 12 月 6 日、奈良県桜井市で開かれました。準備したのは Facebook つながりのロシア好きの主婦たち。初めての取組みにもかかわらず 20 名の参加者が集まり、田中さんのちょっと難しい話に耳を傾けました。

藤本和貴夫先生を偲ぶ会

「まるで同窓会」90名が参会

11 月 15 日、大阪・豊中市の大阪大学会館にて、故藤本和貴夫先生（大阪大学名誉教授、元大阪経済法科大学学長、大阪日ロ協会理事長）を偲ぶ会が、関係団体有志の呼びかけで盛大に開催されました。ロシア史の研究者であり、30 年以上続く日ロ極東学術交流やロシア東欧学会など研究者ネットワークの組織者であり、大阪大学言語文化部の創設や大阪経済法科大学の教育充実に行政手腕を発揮、大阪日ロ協会、シベリア抑留者支援・記録センター、日本ウラジオストク協会などの社会活動にも熱心に取り組んだ藤本和貴夫先生の幅広い活動を反映して、学者・研究者仲間のみならず、藤本先生の人柄に触れた多くの方々が参集しました。

遺影への献花と黙祷で始まった偲ぶ会は、和田春樹・東京大学名誉教授、山垣真浩・大阪経済法科大学学長がまず追悼の言葉を述べ、伊東孝之・早稲田大学名誉教授の献杯、食事・歓談へと進みました。歓談中も多くの方々から思い出が話され、お酒が好きで人と話すのが好きだった藤本先生らしい、賑やかな偲ぶ会となりました。

なお、偲ぶ会を機に、60 名余りの方々から追悼文が寄せられ、当日、立派な小冊子となって参加者に配布されました。

「憂慮する歴史家の会」事務局長として、ロシア・ウクライナ戦争の早期終結を願い、最後まで活動された藤本先生の遺志がいまだ実現していないことが心残りですが、先生の活動をそれぞれが各方面で引き継いでいく思いを新たにした偲ぶ会でした。